長泉寺のあらまし

当山は西暦一四〇七年(室町時代)に、時の若狭国守護　一色満範氏によって現在地より四〇〇メートルほど北東の　高森と言う地域の山中に創建されました。創建時は天台宗か浄土宗であったと言われております。

一色氏の時代が終わり続いて武田氏が若狭を支配するようになって、地頭の白井清胤氏が寺の土地を利用するために現在の地に移転させたのが創建後ちょうど一〇〇年の一五〇七年(戦国時代)です。移転はしても、当山の山号は創建時のものをそのまま引き継いで高森山となっております。

武田氏が織田信長によって放逐された後　若狭国に就いた丹羽長秀氏は、一五七三年(安土桃山時代)長泉寺に日昇本好和尚を招き曹洞宗の寺に改めました。そして改宗後も創建時のご本尊　阿弥陀如来(無量寿・無量光如来)像はそのまま引き継がれたと考えられています。

丹羽長秀氏はわずか十年ほどで若狭から越前・北の庄に移ってしまいますが、同時に日昇本好和尚をも引き連れて行った為、長泉寺はその十五年後に本好和尚の嫡孫　松山好椿和尚が再建するまで無住の寺となってしまいました。

松山好椿和尚は地元杉村氏の力を借りて寺を復興し　長泉寺の開山第一世となって、以後現在の住職は二十九世となります。

本堂正面の須弥壇にある御本尊は、先に記したとおり阿弥陀如来坐像で高さ五十二・九センチメートル、十四世紀(鎌倉時代)の作とされています。脇侍として勢至菩薩と観音菩薩を従え三尊像として祀られていますが元は如来像単体であったと考えられます。

本堂奥の開山堂中央には千手千頭観世音菩薩立像が安置されています。像高百七十九センチメートル、鎌倉末期か室町時代の作と考えられていますが千頭を具えた観音像は他に類例がないということです。この像は当山の本寺である意足寺（現おおい町）の秘仏・観世音菩薩立像の前立ちであったものを開山堂が造営された(十九世紀初め）のちに譲り受け安置されたと伝えられております。

同じ開山堂内にある釈迦如来坐像は当山で一番古い仏像ですが、十一世紀後半(平安時代後期)の制作で、お顔・衣文・彩色あとなどから当時流行の如来像の典型と言われています。像高は五十一センチメートル、頭部・胴体部は桧の一木造りとのことです。

当山の山門は二層作りで上段は鐘楼となっております。二百三十年ほど前(十八世紀後半)の建立ですが、既に何回かの修繕が施されて今日に至っております。梵鐘は先の大戦に供出されましたが、戦後檀家の篤信家によって再生されました。

本堂の横には中国原産とされるスギ科の大木・広葉杉(コウヨウザン)があります。樹高二十八メートル、幹回り三・四メートル、樹齢約三百年で小浜市より天然記念物の指定を受けております。

令和三年八月　改訂